DB方式の検証必要

6テーマでグループ討議

JIA近畿アーキサロン

講演する長坂教授

日本建築家協会近畿支部（JIA近畿、井上久実支部長）は19日、第2回JIAアーキサロンを開いた。参加した約60人の会員・賛助会員が6グループに分かれ、「法令」や「作法」などをテーマにグループ討議した＝写真。

アーキサロンの開催は、建築家サロンとして5月19日の支部総会後に開いて以来2度目。討議による会員相互の理解や建築家としての社会的責任・倫理観の芽生え、互いの情操の向上を目的としており、井上支部長は支部の主要事業に位置付けている。

19日は討議に先立ち、長坂大京都工芸繊維大大学院教授が「建築と文化」について講演した。長坂教授は「文化とは私たちの社会での振る舞いのことであり、社会は都市が支えている。都市とは人の生活を助ける一方、制限する存在でもある」と話し、世界各国の都市と道路、地域特性を解説。「道は移動手段の1つであるが、利用者の連綿とした生活の中で、道路としての機能を超えて使用されている。これが地域の特性であり、われわれ建築家はその場所性を読み取り、建築に昇華させなければならない」と説いた。

グループ討議では、「素材」「作法」「地域」「価値」「施主」「法令」のテーマを持つ6グループでそれぞれ議論し、結果を発表した。

素材グループは「建築において素材の特性や技術は無視できない。毎年のように新素材は開発されるが、一方で長きにわたって使用されている木材などの価値も見直す必要がある。設計する者として、これまで以上に素材について勉強することが重要。素材の扱い方によって建築にアイデンティティーを持たせることが、まち全体のアイデンティティーを形成する」と議論内容をまとめた。

作法グループは「デザインビルド方式が広まっている中で、何が失われ、何が獲得できるのか検証が必要だ。単に制度として考えるのではなく、これから建築家になる若者の精神がどこで育まれるのかを考えなければならない。いかに若い人たちが建築家の〝家〟たるものを体験するかが重要だ」と発表した。

地域グループは「地域には道を中心とした都市の特徴がある。阪神・淡路大震災以降、幹線道路が多くなり移動手段として便利にはなったが、幹線道路は地域やにぎわいを生み出さない。歩行者中心の道路には都市を面と面でつなぐ役割があり、空間としての要素もある。風情や情緒、住みたくなるまちづくりのためには、歩行者中心の道に向かって建築を開いていくべきだ」と議論内容をまとめた。

価値グループは「建築の価値ではなく、建築家の価値について議論した。一般の人は果たして『建築家』を端的に言い表すことができるだろうか。中世ヨーロッパでは、建築家は弁護士や医者と並んで人々にとって必要不可欠な存在だった。われわれはこれを肝に銘じ、自分を磨き続けなければならない」と発表した。

施主グループは「建築と施主の関係は恋愛関係のようなもので、相手に好かれるためには、理解してもらうためにはどうしたらいいか互いに考えている。これは太古から続いてきた文化である。双方が努力しなければ関係は続かない。そして、良い恋愛の末結婚すれば、子どもとしての良い建築が生まれる」とまとめた。

法令グループは「法令には、建築の文化を守るものもあれば阻害するものもある。建築基準法の一部の内容は現代社会にそぐわないほど古くなっており、阻害する一面を持っている。この基準法を、人々が幸せになる法令に改善していくのがJIAの役割ではないか」と議論結果を発表した。